

2017年9月30日発行
日本比較文化学会関東支部

2017年度第2号のレター発行となります。本号では、2017年9月9日(土)に神田外語学院にて開催されました「2017年度東北・関東合同例会」兼「第47回支部例会」での支部会員の発表要旨を掲載致します。

日本比較文化学会関東支部事務局長 郭 潔蓉

◆第47回 関東支部研究例会 ご報告◆

2017年9月9日(土)、神田外語学院・3号館・501教室において2017年度東北・関東合同例会(兼第47回関東支部例会)が開催されました。当日は10名の会員による研究発表が行われました。各発表において積極的な意見交換がなされ、大変有意義な例会となりました。以下、例会での研究発表の要旨を掲載致します。

◆開会の挨拶: 関東支部長 近藤 俊明 (東京未来大学)

◆研究発表:

1. 芭蕉発句の表現特徴と体系化

放送大学大学院 修士課程
平澤 百合子

語と語あるいは句と句の意味関係は、一般に平面図形や立方体で示せるほど単純な意味関係をしてはいない。その理由は(1)当該意味関係は「等距離」ではないので立方体などでの表示には無理があること、(2)類義語彙と他の類義語語彙が結合して「より大きな語彙体系」を形成する場合の実証的研究がほぼ皆無であることによる。本研究は、芭蕉が梅・桜・菊を詠んだ句を中心に、個々の句がどのような表現構成要素で成り立ち、花の句がいかなる意味体系をなす可能性があるかについて、統計手法をも加えた分析結果を提示したい。帰納法的手法で得られた主な表現構成要素は、第1構成要素群＝季語、季重なり、対詠句、破調、破格、第2構成要素群＝初句切れ、二句切れ、冠の命令形、切れ字、間投詞・間投助詞、強め助詞、詠嘆(助詞)、第3構成要素群＝視覚表現、嗅覚表現、聴覚表現、味覚表現、焦点化表現(蕾の花、咲いた花、花盛り、香る花、散る花、散り過ぎた花)、第4構成要素群＝比喻、歌枕、掛詞、縁語、韻、対比、連想、擬人化、第5構成要素群＝直接接続、間接接続、第6構成要素群＝情感的表現(床し、趣深し、風雅、優美感、高德、華やぎ、賑わい、清涼感、爽快感、解放感、期待感、満足感、眩暈感、幸福感、懐旧、別れ、感動、風狂、悲哀、悼み、幻滅感など。)分析の結果、1)梅・桜・菊のように発句数の多いものについては、表現構成要素を分析基準にしてクラスター分析し樹形図で表示することができた、2)表現構成要素数は、梅・菊に比べると桜では晩年の句に向かうにつれ第2および第4の技法の減少が見られた。

2. 中国における自動車メーカーのサプライヤー・システムの現状 — 一汽・VWの事例研究を中心に —

宇都宮大学大学院 博士課程
趙 美慧

中国は2009年から世界の生産量や保有量を持つ自動車大国になった。その背景には多くの外資系自動車メーカーの生産現地化により、技術だけでなくそのサプライヤー・システムも中国に移行し、中国の自動車産業の発展を大きく支えてきた。2014年VWと一汽汽車は2016年からさらに25年の提携関係を延長し、今後中国における現地化生産を推進すると発表した。そして、2016年VWは過去最高の販売台数を達成し、そのうち95%は中国現地で生産していた。

今まで自動車メーカーの競争力を考察する際、サプライヤーと構築している相互依存関係の総体であるサプライヤー・システムに焦点を当てることが多い。外資系メーカーのサプライヤー・システムには、外国側と中国側の力関係に応じて多様性が存在し、現在進行形で変化を続けている。

そのため、本論文は中国における自動車メーカーのサプライヤー・システムの現状を把握するため、長年中国に進出し、中国自動車市場において最も多くのシェアを獲得している外資メーカーVWの合資メーカー、一汽VWを対象に分析を行った。国際的な研究業績の多い朴(2009)、(2011)、藤川(2013)の分析方法を参考し、一汽VWが新たな提携関係を結んだ2014年から現在までのサプライヤー・システムの現状とその生産の現地化移行の進展を中心に考察した。

3. ワシーリー・エロシェンコ思想・活動とノーマライゼーション

筑波大学大学院 博士課程
野田 晃生

ワシーリー・エロシェンコ(1889～1952)は、ロシア出身の詩人である。彼は、4歳の時に病気のために視覚障がい者(全盲)となった人物である。日本において、エロシェンコは全盲のロシア人、無政府主義者、エスペランティスト、詩人、童話作家等として知られる。

本発表では、視覚障がいの面から注目し、エロシェンコについて論じる。障がいを持つ人は、社会・家庭からの保護・ケアが必要となる場面も多い。しかし、このことは障がいを持つ人がかならず他の人の言うことを聞くべきであり、主張をしない、ということの意味しない。これは、人々が皆権利を持って共生する、現在のノーマライゼーションの思想である。

エロシェンコは、障がいをもつ人々が職をもち、社会生活を送ることを主張していた。このことは、障がいの有無にかかわらず、人々が共生することを目指す、ノーマライゼーションの思想に通じるものがある。

本発表においては、エロシェンコの作品・思想・活動を論じることによって、彼の遺したものは現在の我々にとってどのような意味をもつのか、また、福祉・ノーマライゼーションの視点において、我々はどのように考えるべきか、について論じる。

4. ハラル食品店と地域社会について

新宿区区議会議員
野元 明俊

2012年、筆者は放送大学大学院修士課程で「ハラル食品店と地域社会について」をテーマに調査・

研究を行った。当時、新宿区百人町周辺には 10 店舗のハラール食品店があった。樋口・丹野（2000）は、全国のハラール食品店を調査対象として 80 店舗の調査を行っている。この調査では、ハラール食品店の店舗経営者の国籍は、パキスタンがメインアクターであり、バングラデシュ等が続いていた。百人町周辺のハラール食品店は、パキスタンが 1 店舗、バングラデシュ系が 2 店舗存在するものの、ミャンマー系が 3 店舗、ネパール系、タイ系、インド系の店舗がそれぞれ 1 店舗ずつあり、よりバリエーションに富んだ状況であった。

タイのハラール・レストランでは、入り口にタイの人形が置いてあることや店舗でのアルコール提供について、ムスリムから苦情があり、店主はジレンマを抱えていた。また、ミャンマーの店舗では、イスラーム系のロヒンギャ民族の方から難民として訪日したことや、店舗を経営するに至った経緯などを収集した。

地域住民の調査ではイスラーム文化への理解が皆無に近いことが分かった。

今回の発表は、2017 年の同地域におけるハラール食品店と地域社会に関する報告である。

5. 後発開発国におけるグローバル人材育成 —ネパールの教育改革から—

東京未来大学 モチベーション行動科学部 教授
郭 潔蓉

世界規模でグローバル化が深化する中、国際的に社会格差が広がっている。殊に後発開発国においては深刻な飢餓と極度な貧困が大きな社会問題となっているケースが少なくない。こうした課題の多くは教育格差に由来しており、社会的「負の連鎖」を形成している。

この負の連鎖を断ち切るべく、国連では「ミレニアム開発目標（MDGs）」を掲げ、2015 年までにすべての子どもが男女の区別なく初等教育の全過程を修了できるようにするという目標の達成を目指したが、未だその道のは厳しい状況にある。しかし、初等教育を受けられない児童の数は確実に減少しており、開発途上地域では 1991 年の 79.8%から 2012 年の 90.5%へと改善されている。また、国連の援助に伴い、教育改革を進める後発開発国が増え、その内容もグローバル人材育成に向けて大きく進化を遂げようとしている。

因って本報告では、こうした教育改革の実例としてネパールにおける教育改革を取り上げ、現地での視察（2017 年 3 月）を通してその実態と取り組みを検証し、ネパール社会に与える影響と効果を考えたい。また、グローバル人材教育を推進する社会的背景や文化的要因といった側面にも視点を当て、後発開発国におけるグローバル人材育成のあり方についても考察を深めたい。本研究は、多文化社会におけるグローバル人材育成と後発開発国における教育改革のメカニズムの解明の一翼を担う重要な研究であり、今後の比較研究の基礎とすることを目的とする。

6. 表出する老いの恐怖 —有吉佐和子『恍惚の人』に描かれた認知症—

桜美林大学大学院 博士後期課程
城戸 亜希子

超高齢化社会と言われる現代社会において、認知症は深刻な社会問題となっている。しかし、認知症は決して新しい病気ではなく、前近代社会においても「呆け」として存在し、老いに伴う症状の一つと考えられていた。しかし、老いて病むことは当たり前というそれまでの見方を大きく変えたのが有吉佐和子の『恍惚の人』（1972）である。この作品が生み出した否定的認知症観がいまなお多くの人に影響を与え、認知症患者とその家族を生きにくくさせていると言われている。

欧米の現代小説や映画では、認知症患者はその緩やかな動きから「ゾンビ」と表現されることが多いが、

『恍惚の人』に登場する認知症の茂造も不気味で嫌悪感を抱かせる多くの表現で描写されている。茂造は、「精神病患者」で「もう終わってしまった人間」、「壊れた男」と言われ、知能は3～5歳程度、行動は異常で姿は「老醜無慚」と表される。これらの表現が結果的に認知症に対してだけではなく、老いに対する恐怖をも生み出したと考えられる。また、当時まだそれほど問題視されていなかった中年期の老いの恐怖を表出させたこともこの作品の大きな特徴である。

本研究では、『恍惚の人』に描かれた認知症の症状と表現に注目し、認知症を取り上げた他の作品とも比較しながら、当時の認知症に対する社会のまなざしやそこに内在する問題を読み解いてみたい。

7. 子どもが描く外国旅行記における挿絵についての考察

－『骨肉』(八・九月号)「朝鮮満洲旅行記念」における向野啓助の図画作品に着目して－

茨城大学大学院 修士課程

山田 秀平

満洲日本人経済界を形成することにその生涯を尽くした向野堅一(1868～1931)の子ども4人は、大正6(1917)年7月～8月にかけて、朝鮮及び満洲を旅行し、そのときの様子を手作り雑誌『骨肉』(八・九月号)において文章化し、図画を交えて記録を残している。就中、絵日記というべき四男・啓助の作文と図画は、日本の状況とは異なる強く印象づけられた満洲の様子を表現しており、子どもが捉えた光景を今日に伝えている。そこで、その日記に描かれた挿絵は、満洲の何を描いたものなのか、啓助の挿絵と当時の写真映像とを比較特定を試みる。子どもが語る満洲の印象は、今日の我々に何を示してくれるだろうか。

さらに、啓助が日本において日常的に記していた『啓助日記』に描かれた挿絵と、この満洲旅行記に描かれた挿絵を比較して、日常と外国訪問時の挿絵の違いを確認する。そのうえで、1900年代を生きた向野啓助という一人の人物の心理的内容及び図画活動の様子について、今後、考察を深めることへの契機としたい。

8. 児童画に現れる表象としての「太陽」－ 諸外国における傾向とその特徴 －

茨城大学大学院 修士課程

金山 愛奈

岡本太郎(1911～1996)は、『今日の芸術』(1954年)のなかで「赤丸チョンチョン、子どもの『八の字』」と題し、児童画に現れる「太陽」に関心を抱き、学校で行われる図画教育に対して批判的な見解を示している。岡本に言わせれば、だれもが描く太陽のような符丁は創造的な表現ではないとしている。しかし、描画発達段階の観点から言えば、このような児童画の特徴は6、7歳ごろの図画の形式的表現期にみられ、空であることの記号として描かれる表象とされている。また、諸外国によって色や形に異なる表現方法がみられると指摘されてきた。そこで本研究では、太陽に現れる表現の違いを具体的に比較検討するため、主に『教育美術』と『美育文化』における児童画展覧会から、日本を含めた諸外国の「太陽」に現れる傾向を明らかにする。最終的に、子どもの描画における太陽について、岡本太郎が「黒い太陽」、高村光太郎が「緑色の太陽」と捉える作家の見解とともに、象徴としての太陽の存在を導き出した。

9. 露伴における「釣」の意味すること — 近代へのまなざしを探って —

宇都宮大学大学院 博士課程
梁 鎮輝

近代文豪の幸田露伴（1867-1947）は小説家から出発し、随筆・考証・研究・史伝・評論など多岐に渡って活躍した。同じ年に生まれた尾崎紅葉、子規、夏目漱石、齋藤緑雨に、少し年長の坪内逍遙、森鷗外、二葉亭四迷を加えれば、近代文学とりわけ明治文学の骨格になる。

デビュー作の「露團々」をはじめ、「風流伝」「五重塔」「運命」などの作品が世に知られており、従来の露伴研究も明治期の小説に注目する傾向がある。長編小説「天うつ浪」の未完から、小説らしい小説を書かなかつたと言われる露伴だが、多彩なジャンルの「雑文」を後世に遺した。それらは従来の研究で軽視されがちな露伴の知的遺産であり、露伴の世界に正確に接続するための不可欠なものでもあると考える。

従って、本発表はとりわけ露伴の描く「釣」に注目することにした。露伴は大の釣り好きであることは、娘の幸田文・塩谷贊・柳田泉・下村亮一などによって記録されている。そして、随筆では「鼠頭魚釣り」「釣魚談一則」、考証では「江戸時代の釣」「釣車考」、小説では「蘆声」「幻談」などの作品が挙げられる。

露伴は、如何のように「釣」の世界を描いたのか、そしてそれを通じて当時の世間に何を伝えようとしたのかを考察する。そこからは、西洋化・近代化する日本への懸念と、露伴の「趣味」に託した想いが伺える。更に、露伴の「趣味論」の背後には、「中国」との緊密なつながりも見えてくる。

10. 在満日本人による近代漢詩の特徴 — 向野堅一(1868～1931)による『拙逸庵詩抄』を対象に —

茨城大学 教授
向野 康江

日本の江戸期の漢詩壇については、すでに拙論「」で述べておいた。向野堅一（1868～1931）の妻の実家・廣瀬宗家が生んだ廣瀬淡窓の漢詩についても、詩壇でのその位置づけを確認した。明治元年に生誕、英語修猷館に進学するまで、元小倉藩士・秦巖に4年間漢学を学び、その後、日清貿易研究所で清語官話を学んで、日清・日露戦争の通訳官を体験しながら、永遠に日清貿易に従事するという初志を貫いた向野堅一の漢詩の作品には、どのような味わいがあるのだろうか。漢詩教育は、近代において衰えたと思われがちである。しかし、むしろ近代において漢詩は盛んになっている。つまり、身分にかかわらず漢詩を嗜むことが明治・大正のインテリ階層の証であることとする風潮をくみ取れるからである。しかも向野堅一は海外に居住していた日本人である。在満日本人が漢詩の会を開催しながら、満洲での時事や心情を詠んだ作品にはどのような特徴があるのだろうか。本発表では、満洲藝壇の人であり、奉天の街をつくりながら満洲日本人経済界の重鎮となった向野堅一の『拙逸庵詩抄』を取り上げながら論説する。

◆閉会の挨拶：東北支部長 佐藤 和博（弘前学院大学）

※大会閉会后、懇親会を行いました。

以上